

『解脱の宝飾』第17章 智恵の完成（般若波羅蜜） pp249～251

【今私たちはどこにいるのか？】

はんにや
 智恵は数習（しゅじゅう）されるべきこと

数習の必要性

数習そのもの 前行

等至（三昧）

後得 p.249-10 から p.253-16 まで

きざし
 数習したことの証因

ここから4ページ半にわたって「後得」が続きます。

この4ページ半を独断で分けてみると

- a) 後得においてはどのようにあるべきか
- b) 勝義・空性・般若波羅蜜を瞑想すると、福德が大きいこと
- c) 空性の義がなければ解脱を得ないこと
- d) 空性の義があれば全てが含まれること
 - 帰依 ← 今日はこちらまで
 - etc

【a) 後得においてはどのようにあるべきか】

後得

〔第三：等至から立ちあがった〕後得は〔縁起の諸法〕すべてが幻術のように見るし、施しなどの福德の資糧をできるだけ集積するのです。

- (1) そのようにまた『聖撰』に、「五蘊は幻術のようだと知るし、幻術は他で、蘊は他だとしなない、種々の想いを離れていて、寂靜を行ずる者 — 彼が、最上の般若波羅蜜を行ずるのです」と説かれています。
- (2) 『三昧王経』に「幻術を行う者たちが色を化作し、馬と象、車の様々を造ったそこに現れたものは何も無いのと同じく、一切諸法はそれと似ていると知るべきです」と説かれています。
- (3) 『行真實論』にもまた、「無分別であり、念ずる知は有るけれども、福德の資糧は断絶しない」と説かれています。

後得：さとした後に得られた、の意（中村元『仏教語大辞典』）

後で得られた、という意。悟った後に得られること（石田瑞磨『例文仏教語大辞典』）

ཇེ་ཏུ་འགྲོ་བ་ལ་འཕྲོད་པ་
 じえ・とプ after + obtain, get
 post-meditation (situation), subsequent attainment/realization

2019 ガルチェン・リンポチェのご法話

四日目「七つのターラー菩薩讚」から イナさん英訳

So practice doesn't mean that you just sit there and only just meditate but don't ever apply it, actually practice means application, means activities, everything you do, you work with whatever comes up in your day to day life. So you gain an experience in your meditation but that experience then must be brought into your post meditative state, it must be merged with the post meditative state. And so if you are unable to do that, if you are unable to bring your practice into the post meditative state, then your dharma and you, basically the person and the realization go separate ways. Then you are not actually practicing the dharma and so this is what we have mentioned before, this is then what happens, we see it but then still we become lost in negative activities.

ただ座って瞑想するだけで応用しないなら、修行ではありません。修行は、応用すること、行動すること、日常の生活の中であなたの為すことのすべてです。ですから瞑想で得た体験を、瞑想後の状態（後得）に持ち込み、それと混ぜ合わせる必要があります。それができなければ、つまり修行を後得に持ち込まないなら、法とあなた、悟りと人が、分離してしまいます。そうすると実は仏法を修行していないことになり、先に述べたように、分かっているのになお悪行に迷うこととなります。（『清浄の道』 p.65）

In the post-meditative state, everything should be seen to be like a magical illusion, and the accumulation of merit, generosity, and so forth should be gathered to the best of one's ability.

後得においては、（空性）
 すべてを幻のように見るべきであり、瞑想によってすべてが幻と知るべし
 また布施などの福德をできる限り積集すべきである。瞑想後に徳を積むべし

- 経証 1) 『聖撰』
 2) 『三昧王経』
 3) 『行真実論』

そのように「繰り返し」数習することと、等至・後得の二つもまた別異にならないし慢心を離れることになるのです。そのようにまた『聖撰』に、「私は等至〔に入定したとか、〔等至から〕立ち上がったという慢心が無い。なぜかという、法の自性を遍知しているから」と説かれています。

しゅじゅう
数習する：

𑖦𑖳𑖱𑖱𑖱𑖱 慣れる accustom, habituate

数習することによって、瞑想と瞑想後がひとつになる + 慢心を離れる
(混ぜ合わせる)

【b)勝義・空性・般若波羅蜜を瞑想すると、福德が大きいこと】

そのように [方便の分が堅固であるとき、] 勝義空性 [である] 智恵の完成 (般若波羅蜜) その状態に一瞬ほど住しても、劫の間に [それを離れた散乱の心により] 聴聞や読誦や善根 [、例えば] 施しなどを為したのより、福德は無量に大きいのです。

(1) そのようにまた『説真実経』にもまた、「シャーリプトラよ、誰かが一切の間、[法を] 聴聞 [して、他者に講説] したの [は、福德が多く増長する。しかし、それより、誰かが弾指したほど [の間] に真実 [について] の等持 (三昧) を修習^{しゅじゅう}したなら、福德は [さらに多く] 増長する。シャーリプトラよ、ゆえに、真実 [について] の等持を他者に対して、鄭重に教誡すべきです。[なぜなら、] シャーリプトラよ、仏陀として授記された菩薩すべてもまた、この等持に住するものばかりです」と説かれています。

(2) 『廣大分別経』にもまた、「瞬間、静慮に順じて行ったなら、三界の人々に生命を施したのより、これは益が大きい」と説かれています。

(3) 『大頂髻経』にもまた、「多くの劫の間に聞・思したのより、一日、法の義を修習したことは、福德が大きい。それはなぜかという、それにより生・死の道を遠く離れるからです」と説かれています。

(4) 『入浄信経』にもまた、「三界の有情が生きているかぎり、生活 [するため] の資具により資糧を積みかさねたのより、ヨーガ行者が空性を一座修習したことは、福德が大きい」と説かれています。

Therefore, the merit of abiding for only a moment within the state of ultimate truth, emptiness, the perfection of wisdom awareness, is limitlessly greater than kalpas of listening to or reading the Dharma, or practicing the roots of virtue, generosity, and so forth.

であるから、勝義 (=) 空性 (=) 般若波羅蜜に一瞬でも住するならば、劫の間、聴聞したり、読誦したり、布施などの善根を積んだりしたのより、福德は無量に大きい。

しゅじゅう
修習する：

𑖦𑖳𑖱𑖱𑖱𑖱 瞑想する meditate, meditation

- 経証 1) 『説真実経』
 2) 『廣大分別経』
 3) 『大頂鬘経』
 4) 『入浄信経』

【c) 空性の義がなければ解脱を得ないこと】

空性の義が ^{こころ}意に住しないなら、他の [散動した智慧による] それら善によって自己は解脱を得ないことを、説いています。

(1) 『諸法無生説示経』に、「長い時間に戒を護るし、千万の劫に静慮（禅定）に依ったけれども、實際のこの義を証得していないなら、この教えにおいて彼らは解脱しないでしょう。何も無いこの法を誰が知るのか — [それを知る] 彼はいつも一切法に執着しないでしょ」と説かれています。

(2) 『地蔵十輪経』にもまた、「等持（禅定）を修習したことにより、疑いを断つべきです。それ以外、他によっては可能でない。それより等持を修習することが最上であるという。賢者たちはそれに [鄭重に] 勉励すべきです」といい、

(3) また『同経』に「法の書写と読誦と聴聞と解説と諷誦を却にわたって為したのより、一日、修習したことは福德が大きい」と説かれています。

If the meaning of emptiness does not dwell within the mind, we cannot attain liberation by means of the other virtues.

空性の意味が心（意）に住していないなら、その他の善によっては解脱を得ない。

- 経証 1) 『諸法無生説示経』
 2) 『地蔵十輪経』
 3) 『同経』 = 『地蔵十輪経』

【d) 空性の義があれば全てが含まれること】

そのような空性の義を具えているなら、この法において収まっていないものは一つも無いのです。

[それが] 帰依することでもあるのです。

『無熱惱所問経』に [、真実の三宝帰依とは何かに関して]、「菩薩は、一切法が我が無い、有情が無い、生命が無い、人が無いと知る。色としてではない、相としてではない、法としてではないと如来が正しく見られないそのようなものは、財物の無い心により仏陀に帰依したのです。

如来の法性なるものそれは、法界です。法界なるものそれは、一切法に随っているという。そのように一切法の [法] 界に随ったことが見える。そのように見えるその

ようなものは、財物の無い心により法に帰依したのです。
 法界 [である] 無為を修習するのと、声聞乗 [である] 無為に依るのと、有為と無為
 が二として無いこのようなものは、財物の無い心により僧伽に帰依したのです」と説
 かれています。

「この」「法」 原語では ཚཱ་འདི་

「この」が指しているのは？ ལྷོང་པ་ཉིད་ཀྱི་དོན་ 空性の義

「法」が指しているのは？ 英語では path と訳されている 教え？

When one is endowed with the meaning of emptiness, there is not a single thing which is not included in **this path**.

そのような空性の義（意味）を具えるなら、この法に収まらないものはひとつもない。

帰依も…

正覚に発心することも…生起次第の本尊を修習することと真言の念誦も…護摩も etc
 と後に続く…

空性を知るなら、一座の瞑想だけでなくすべてに広がっていく →後得

財物の無い心？ : unconfused mind 散乱・迷乱のない心

མང་ཟེང་མེད་པའི་སེམས་ without distraction, pure, not mixed with other things

有為 : compound

つくられたものの意。因と縁の和合によって作りだされた（為作・造作・有作の）諸現象をいう。因縁によってつくられた生滅変化するもの。つくられたもの。無為の対。

無為 : uncompound

つくられたものでないもの。種々の原因・条件（因縁）によって生成されたものではない存在。因果関係を離れている存在。成立・破壊を超えた超時間的な存在。現象を離れた絶対的なもの。ニルヴァーナの異名。大乘仏教では真如そのものと同一視される。唯識説では空に同じ。

（中村元『仏教語大辞典』より）

【参考資料：禅定を示す用語】

禅定を示す用語

| サンスクリット語 | 漢語 | チベット語 |
|---|----------------------------|---------------------------|
| samādhi | 定、定意、三昧、三摩地、 等持 、正受 | ཏིང་ངེ་འཛིན་ (ていんげーずいん) |
| <p>意味 一般的の最広義の定を指す。 心をひとつの対象に住せしめて平等に継続したもつこと。三昧に同じ。</p> | | |
| dhyāna, jhāna | 禅、禅那、 静慮 、思惟修 | བསམ་གཏན་ (さむてん) |
| <p>意味 禅定。静かに真理を思うこと。心を散乱ないように統一すること。</p> | | |
| samāpatti | 定、三摩鉢底、 等至 | མཉམ་པར་བཞག་པ་ (にやむばるしやくば) |
| <p>意味 身心の平等で安らかな状態。 四禅四無色定(八定)とか、これに滅尽定を加えた九次第定とかいわれる場合の定はすべて等至。</p> | | |
| śamatha, samatha | 止 、奢摩他 | ཞིག་ནས་ (しねー) |
| <p>意味 vipaśyanā, vipassanā(観、毘鉢舍那)の語と双べて、止観として用いられるのが常である。 止は心が止寂した状態で、無色界定に多く含まれ、観は観察の智慧を指す。 定に七つ名があるうちのひとつ。煩惱を静め、一つところに心を落ちつかせること。 常に観に対し、両者を合わせて「止観」という。</p> | | |
| cittaikāgratā, cittekaggatā | 心一境性(しんいつきょうじょう) | |
| <p>意味 心を一つの対象に集中すること。精神統一 concentration そのものを意味する</p> | | |
| yoga | 瑜伽 | |
| <p>意味 仏教以前からバラモン教などで精神統一のことを意味し、仏教の禅や定と同じようなもの。 心をひきしめること。心の統一。瞑思。意を制御し、心の統一をはかる修行法のこと。</p> | | |

(水野弘元『仏教要語の基礎知識』 pp201-202、中村元『佛教語大辞典』より抜粋)